

現代魔物娘研究録#3

# 私の狂気

My Insanity

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

著：雑兵

画：些細



私の狂気



コトン、コトン、コトン、

最中義朗（もなか よしろう）は机に頬づえを付いてシヤーパーンで繰り返し白紙のノートの上を突いていた。

白い紙の上には無数の黒い点がばらまかれ、意味を成す文字も図形も書かれていない。

「……はあ」

深くため息をついて義朗はシヤーパーンを投げ出す。

勉強をしなくてはいけない、浪人生というのはこの世の誰よりも努力しなくてはいけない身分なのだ、白紙のノ

ートの前でため息をついてるような猶予は一秒もない。

だが、意思に反して手も頭も働いてくれない。

自分が受かるビジョンがどうしても浮かばない、勉強しても勉強しても無駄に思える。

四浪

四浪だ、この就職難の時代に、そろそろ人に話しても笑い話にできない領域だ。

そして今も受かれる気が全くしない。

このまま受かれなかったらどうなるんだろう、自分はどうなってしまうんだろう。

真つ暗な谷の上に掛かるぼろぼろの吊り橋の上を歩いていけるような気分だ、必死に頼りない足場をつぎはぎしながら先に進もうとするが橋はどんどん脆く、細くなっている。落ちたらどうなるんだろう、谷の底に落ちたらどうなるんだろう。

どうもこうもない、完全な人生の敗者が一人出来るだけだ、誰にも存在価値を認めてもらえない、親にすら認めてもらえないゴミのような……。

「ああ、もう」

ぱりぱりと頭を掻き毟る、そんな事にならないために今頑張らないといけないんじゃないか、ほら、動かせ、手を動かせ、頭を働かせろ。

……ちくしよう、どうしてこんなに辛い事をしなくちゃいけないんだ……

雑念を捨てろ馬鹿、勉強を……勉強をするんだ。

ぱりぱりぱり

また頭を掻き毟る、机の上のノートに髪の毛が落ちる。

「ああ、くそっ」

髪の毛をゴミ箱に払い落としながら悪態をつく、このままだといつかハゲになってしまう、親父も随分と後退してるしハゲは遺伝だっていうし……。



いやだからまた余計な事を考えてる暇があったら勉強を  
……。  
ばりばりばり

ピンポーン

思考の堂々巡りに陥っていた義朗を救ったのはアパー  
トの玄関からのインターホンだった。  
はっとして室内を見回す。

散らかってはいるがとりあえず見られてまずいものはな  
い。

新聞の勧誘か何かだったら物も言わずにドアを閉めてや  
ろうと思いつながらドアを開く。

玄関先に立っていたのは制服姿の一人の少女だった。  
マフラーを首に巻き、癖のないロングの黒髪に特徴的に  
大きなヘッドホンを付けている。

「……お疲れ」

「あ……ミカ？ 今日来る予定だったか？」

「予定はなかったけど近くに寄る機会あったからついで  
に、兄さんどうせまたるくなもの食べてないだらって思  
って」

そう言つて最中美香（もなか みか）は兄の背後の部屋の様子を覗いて顔をしかめる。

「ほらもう、部屋もすぐそんなことになるし……」

ため息をついて玄関に上がる。

「おい勝手に……」

「料理してあげようかと思つてたんだけど？」

手に下げていたスーパールの袋を掲げて美香が言う。

美香の料理の腕前はなかなかのものだ、加えてこの所まともな物を食べていない。

「あ、どうぞどうぞお入りください」

「現金なんだから……」

美香は少し笑つて見せる。

（……相変わらず美人だなこいつ……）

美貌、と言つていいだろう。兄としての量眼目を差し引いても同年代より少し大人びた顔立ちはどんな表情でも様になる。

いつも本当に同じ遣伝子の持ち主だろうかと疑う。

「普段何食べてるのホント」

溜まったゴミ袋を見ながら美香が言う。

「まあ……適当に色々」

「どうせカップ麺とかコンビニ弁当とかそんなんばっかでしょ」

「いいだろ、食いものに時間かけてる余裕ないんだよ」

「身体壊したら元も子もないよ？」

言いながらマフラーとヘッドホンを外してエプロンを身につけて台所に立つ。

「台所、私が前に使つてから一回も使つた形跡ないし……」

忙しなのは知ってるけどさ」

「何作ってくれんの」

「肉じゃが」

「おおう、助かるわ……」

「座つて待つてよ」

義朗は言われて勉強机に戻る、しかし台所から聞こえる包丁の音や漂ってくる匂いで集中できない、いや、何がなくとも集中はできないのだが。

結局またシャーペンをとんとんしているうちに料理ができてしまった。

盆の上に乗せられてやってきたのはサンマの塩焼きに肉じゃが、豆腐とわかめの味噌汁、炊いたご飯、スーパード買ってきた漬物。

味気ない食事ばかりしていた義朗にとっては輝かんばかりに見える品々だ。



「マジで感謝！いただきまっす！」

「がっつかないでよもう……」

猛烈な勢いで食べ始める義朗に苦笑しながら美香は自分の分にも箸をつける。

「御馳走様でした！」

「早いよ、消化に悪いって」

食事を終え、美香が台所で食器を洗う後ろ姿を見ながら義朗はぼんやりと考える。

(劣性遺伝と、優性遺伝……)

いや、別に劣性遺伝というのは「劣った遺伝子」という意味ではなく、次の世代に受け継がれ辛い遺伝の事だと言うのは知っている。

しかし文字通りの「劣った遺伝子」と「優れた遺伝子」というのは間違いない存在するのではないだろうか、美香の姿を見てみるとそんな思いにいつも捕らわれる。

義朗は要領が悪い、小さな頃からずっとそうだ。

何をするにも人よりワントンポ遅れるし、物覚えも悪い、夢見がちな性格で芯がふわふわしているというのめよく人から指摘される。

容姿も大して優れている訳ではない、というか最近ストレスからやつれ始めているため非常に不健康そうな顔色

と顔つきになってきている、おまけに頭を掻く癖から若干髪の毛の生え際が危険な事になってきている。

対して美香は幼い頃より要領がよく、何をしても人並みかそれ以上にこなして見せる、性格もしっかりしている。

小学校の時に皆が泣いて嫌がった予防接種の注射の時も泣き言一つ言わなかったのがとても印象に残っている、ちなみに義朗は仮病を使って学校を休もうとして親に怒られた。

雑誌の読者モデルにスカウトされた時も反対する親を有無を言わず押し切って結局モデルになってしまった。

そう、モデルである、なんとと言っても美香は容姿に優れている。

結構な頻度で仕事が来るようになったらしく、高校生のお小遣いというには少々大きすぎる金額が入るようになってきている。

かといって学業が疎かになっているかというところではなく、断る所は断って成績もしっかり上位をキープしているという。

これでは親も黙るしかなかった。  
ここの所の自制心が最も両親からの信頼を得ている部分であり、義朗に足りていない部分でもある。

(……きつとあいつは俺みたいにはならないだろうな……  
…受験でも何でもうまくこなして……ああ、やめやめ、  
比較しても落ち込むばかりだ)

「お茶入れたよ」

ぐったりしながら勉強机に戻ろうとする義朗をお茶を乗  
せた盆を持って戻った美香が呼び止める。

「根詰めすぎてもよくないよ、少し休憩しなよ」

「……ああ」

ちゃぶ台に戻ってお茶を受け取った。

「あー……」

と、周囲を見回していた美香が部屋の隅に落ちている雑  
誌に目を留めてそれを拾い上げた、義朗は内心しまつ  
た、と思つた。

美香が表紙を飾っているファッション雑誌だ、参考書を  
買いに行った先の本屋で見かけたのでつい買ってしまつ  
た。

「買ったんだコレ、どう？」

今年は〇〇系で決まり！などの煽り文句に囲まれた表紙  
の美香は壁に寄りかかって季節のお洒落着に身を包み、  
小首を傾げてカメラの方を見ている。

本当にカメラ栄えする姿だ。

「よく撮れてる」

「美少女でしょ」

「そりゃいいんだが……ちよつと表情固くないか」

「それがウケいいんだってさ」

自身を読むとそうらしい、「ドライ系女子高生」なんて  
肩書きを付けられているのを見た時は思わず笑つてしま  
つた。

「こうして見ると印象違うな」

「営業用の顔してるからね」

「ずず、とお茶をすすする美香。」

「でもなあ……」

「うん？」

「ああ、いや」

こうして表紙で固い表情をしている時よりそうしてリラ  
ックスしている時の方が可愛く見える、と、思ったのだ  
が自分の妹をベタベタ褒めるのも気持ち悪いと思つたの  
で言葉を濁して別の話題を探す。

「父さん母さんは元気にしてる？」

「いつも通りだよ、あの人は」

(あの人は、か……)

義朗は頭を掻く、要領のいい美香だが何故か両親との折  
り合いだけは悪い、いや、美香が一方的に親を嫌って  
いる様子なのだ。

反抗期なのかもしれないが、どうも何か理由があつて嫌つているように義朗には見えるのだ。

「ん……」

と、美香のスマホが振動した。

「もしもし……ん、兄さんのとこ……いいじゃない別に、はいはいはい、わかりましたー」

噂をすればというか、親からの電話だったらしい、まだ相手が喋っている途中だったが美香はさつさと切つてしまふ。

「おいおい……ちゃんと話聞けよ」

「言う事わかりきつてるんだもん、兄さんの所には行くなつて」

「……母さんの言う通りあまり俺のとこりに頻繁に来なくていいんだぞ、忙しいんだろう？」

「私の勝手でしょ」

機嫌を損ねた様子で美香は立ち上がる。

「勉強の邪魔だつて言うなら退散しますよーだ」

「あ、いや、俺は邪魔とは……」

「ま、ホントにいつまでも居座られてちゃ兄さんも勉強できないでしょ、そろそろおいとまするね」

「ああ……」

マフラーとヘッドホンを付けると美香は玄関に立つ。

「じゃあね、無理しないようにね？」

「ああ……メシ、ありがとうな」

「どういたしまして」

手をばたばた振ると美香は出て行つた。

「……」

部屋はしんと静まり返る。

(……寂しい、な……そういや、まともに人と会話したの久々だったな……おし、頑張らないと)

義朗は改めて机に向かつた。



「やつぱり吉田（よしだ）君の撮影の手応えとしても彼女が他より抜けている印象なのね？」

「ええ、やつぱり妙子（たえこ）さんの目に間違いはありませんでしたよ」

妙子と呼ばれた女性はルーージュを引いた唇を満足気な笑みの形にした。

テーブルの上にあるのは二人の注文したコーヒーカーップが二つとと十数枚の写真、色々な服装やポーズを取っている一人の少女……美香を撮影したものだ。

二人はファッション雑誌「デビル」のスタッフ、美香が所属している雑誌だ。

路上で美香という原石を見つけたのが妙子、つまりスカウトしたのが彼女であり、美香の撮影を担当しているのがカメラマンが吉田だ

吉田がそのうちの一枚を拾い上げてじっと見る。

「可愛い子はごまんといますけど特に彼女は自己管理ができてるのが素晴らしいですね、こういう仕事では一番大事な事です。彼女くらいの年齢だとそれが一番難しい……しかし……」

手の写真では美香が笑顔を見せている。

「彼女、笑うのが上手ね」

「ええ」

上手、とは言っているが二人の表情は晴れやかではない。

「家庭環境は？」

「特に問題があるようには見えなかったですけれどね」

「そう……」

妙子はもう一枚の写真を拾い上げて見る。木陰で愛いを含んだ表情をする美香が映っている。

「こつちが恐らくより彼女の素顔に近い、だから惹きつけられるものがあるのね……」

モデルは笑顔だけではない、様々な表情を売る。

美香はより陰のある表情にこそ魅力があった。それは少々年不相応な魅力と言える。

「家庭環境じゃなくて……彼女……」

写真の中の美香の表情を見ながら妙子は考え込む。

「辛……とても辛い恋をしたんじゃないかしら」

「どういう根拠ですか？」

「勘」

「だと思ってみました」

妙子はいつでも有能だが、時折こういう無根拠な事を言う。

そしてそれが当たっていたりする。

「彼女の目、乾いているもの」

「ドライ系ってやつですね」

ドライ系女子高生、妙子が美香につけたキャッチコピーだ。

「付けた時はもうちよつとかっこいい意味合いで付けたんだけどね、クールとかそっち寄りの意味で」

妙子はもう一枚の写真を拾う。

写真の中で美香は冷たい目で空を見上げている。

「でも、そんなに長くないけどちよつと付き合うと見えてくるものがあるじゃない？撮影するから比喻でなくよくその人の事を「見る」事になるんだし」

妙子は写真の中の美香の目に入る。

「もう、一生分の涙を流し尽くしちゃったって目をしてるの」

「僕にはそこまでは分かりかねますけどね……」

「カメラマンの癖に」

「『魔物』の勘は僕には備わってないですからね」

妙子は頬杖をついて考え込む。そんな妙子を見て吉田は苦笑する。

有望とはいえ美香は契約したプロではなく、読者モデルの一人にすぎない。

深く首は突っ込まないのが普通だが「彼女達」はどうもこういった人間を見ると見過ごしておけない習性をしてるらしい。

「よし……お節介かもだけど、ちよつとひと押ししてあげますか」

・

・

・

「……」

美香は手にした紹介状に書かれた店名と目の前にある雑居ビルの看板に書かれている店名を見比べた。

「サロン・アルラウネ」

（……怪しいところじゃないよね？）

美香は常に用心深い。モデルにスカウトされた時も本当は相手にするつもりはなかった。

訳あって思い直した時にもその場では返事をせず、紹介された雑誌が実在するのか、本当に名刺の相手は在籍しているのか、説明に嘘はないか。

できる限りの範囲で調べた結果シロと判断して仕事を受けたのだ。そうして信頼を置いた仕事先が紹介した場所だから信頼できるはずだ。

少しばかりの不安を胸に美香はエレベーターの三階のスイッチを押した。

エレベーターを出てすぐに「サロン・アルラウネ」はあった。

(……森?)

店の印象はそれだった。

店内には沢山の観葉植物が置かれていた、いや、植木に植えられているものだけではなくどう見ても壁から自生しているようにしか見えないもの達。

それらが店外にまで溢れんばかりに生い茂っているのだ。

店内に足を踏み入れるとそれらの植物や花からのむっとするような濃厚な香りが美香を包んだ。

しかし不思議と不快には感じなかった、むしろその香りをもっと嗅ぎたくなるような感じがする。

(アロマかな……すごい凝ったインテリア)

「あらあ……いらつしやいませえ……」

と、店内から声がかかった。見てみると店の奥のカウンターに店員らしき女性が座っている。

美香は少し緊張を解く、店員が男性だったら帰ろうかと思っていた所だった。

「ええとお……申し訳ありませんが……当店は会員制でしてえ……ご予約のないお客様はあ……」

カウンターに座る店員はウェーブの掛かったふわふわとした髪に優しく目尻の垂れ下がった美しい女性だった。非常に間延びした喋り方をする。

「はい、予約していた最中美香です」

美香は紹介状を見せながら名乗る。

「あらあら……そういえば今日でしたねえ……失礼しましたあ……いらつしやいませえ……ようこそサロン・アルラウネへえ……」

美香はぼりぼりと頬を搔いた、ちよつと苦手なタイプかもしれない。

「それではー、こちらにどうぞー」



「ふう……う……」

数時間後、美香はふらふらと頼りない足取りで帰路に歩いてた。

まだ肌寒い季節なのだが全身は火照り、普段は冷えやすい指先やつま先までぼかぼかと温かい。

整体、マッサージの類を受けたのは初めてだったがこれは正直……。

(プロって……すごい)

おっとりした物腰に少々不安を覚えていたがそこはやはりプロらしく、マッサージが始まると美香自身が意識もしていなかったような体中の凝りを見つけて出した。

そして全てを優しく、しかし徹底して解してくれたのだ。

最初は苦手に感じたあの間延びした口調も夢見心地の状態だと耳に心地よく、加えてあの森のような香りがより陶醉を深くする。

あのアロマはマッサージに使った香油にも入っているらしく、まだ体からあの香りが立ち上るのがわかる。

(いいお店紹介してもらっちゃったかも……でもちよつと……気を付けないと……)

実心地良すぎて性的な快感に近いものを感じてしまったのも確かだ、変な目で見られてはいけないのでそこは注意しよう、そう思った。

「……」

駅について家の最寄り駅の切符を買おうとする、が、その手が止まった。

(……兄さんに会いたいな)

脈絡もなくぼかん、とそんな考えが浮かんだ。

考える間もなく指は兄の住むアパートの近くの駅の切符を購入していた。

目の下に隈が出来た顔、掻き塗ったためぼさぼさになった頭は多分酷く見えるだろうが外見を気にするような心境でもない。

ふらふらと机から立つとドアを開ける。

「お疲れ」

「何だ、またお前か」

「ひどくない？」

「まあ……いいや、上がれよ」

「おじやましまーす」

美香が部屋に上がってきた時、ふと義朗の鼻をいい匂いが掠めた。

「何だお前、香水付けてるのか？」

「ん？違う違うアロマ油、スタッフの人の紹介でマッサージ店行ってきたんだ」

「マッサージ店？……おい、おい美香」

「何？」

「如何わしい店じゃないだろうなそこ」

「マッサージ店にどんなイメージ持ってるの？」

「いや、しかしその……美香の年で行くようなところで

は……」

「大丈夫、店員さんも女の子の人でマッサージも本当にプロって感じだったよ」

「女性か、よかった……」

「兄さんA Vの見すぎ」

「だっ……」

絶句する兄をよそに美香はマフラーとヘッドホンを外すと一人暮らしの狭い部屋に敷かれた義朗の布団にころん、と寝転がる。

「何しに来たんだ……」

「んぐ……何となく？暇つぶし」

「と……」

父さんと母さんがまた怒るぞ、と忠告しようとしたがまた美香が機嫌を損ねるのが目に見えていたので言うのはやめた、それにどうせ言ったって耳も貸さない。

「邪魔だったら帰るけど？」

「いや、俺も煮詰まってるな……ちよつと気分変えたかったから丁度いい」

これは本当だ、勉強に行き詰まると陥るあの思考のルー

プに入りかけていたところだった。

「茶でも出そうか」

「あたし入れるよ」

「いや、俺が入れるから待ってる」

そう言って義朗は台所に行った。

「……」

兄の後ろ姿を見送った美香は義朗の枕を抱き締めて顔を埋めた。

「……」

息を吸うと義朗の匂いがする。

「……」

「……」

「……」

「……」

「何やってんだお前」

「兄さん枕臭い、頭洗ってる？」

「ほっとけっての」

二つのマグカップをちやぶ台に置くと義朗は座布団に座る。向かいに美香も座る。

何となくテレビを付けると昼のワイドショーが流れ始めた。芸能人のだれそれが浮気したという話題でコメント達が大真面目な顔をして議論している。

義朗はぼんやりとそれを眺めていたが、やはり美香の方から微かに漂うあの香りが気になった。

その美香の方を見てどき、とした。

美香は普段から色白で綺麗な肌をしているが確かに今日はその肌にはんのりと赤みが刺してより滑らかに見える。

それだけではない、瞳も唇も黒髪もその隙間から覗くうなじもしっとりとした艶を帯びているように見える。

「効果あるでしょ」

「あ、ああ」

テレビの方に視線を向けたまま美香が言った、見ているのを気づかれているとは思ってなかった義朗は思わず動揺する。

「触ってみる？すっごいツヤツヤしてんの」

変わらず視線をテレビに向けたまま美香は袖を引いて手首を露出させるとすつと腕を義朗の方に伸ばした。

「……」

一瞬躊躇したが、必要以上に意識するのも逆に変だと思つたのでその手首を掴んでみる。

しとつ

「おおう」

思わず声を上げてしまった、吸い付くような感触とはこの事か。

「すごいなほんと」

「匂いもいいでしょ」

言われて手首に顔を近付けてみるとほんのりとあの香りがした、いい匂いだ、いつまでも嗅いでいたくなる。

「ふふふふつ、ちよ、鼻息くすぐったいよ」



「あ、すまん」

腕を引いて掴まれていた箇所を押さえると美香はくすぐす笑う。

「兄さん変態っほい、やだこわいこわい私逃げなきゃ」

「人聞き悪いな!？」

「あはは」

笑いながら美香はマフラーとヘッドホンを取って玄関にまで逃げる。

「じゃ、私逃げるね、ばいばい」

「ホントに何しに来たんだお前」

笑いながらドアを閉める美香を義朗は苦笑で見送った。

残ったのは流れるどうでもいいテレビの音声と二つのマグカップ、そして美香の残り香。

「……アホか俺は」

すんすん、とその香りを名残惜しむように鼻を鳴らしている自分に気付いて義朗はまた頭をばりばり掻いた。

美香は急ぎ足で帰り道を歩いていった。

ずっと、義朗に触れられた手首をさすっている。

その手が小刻みに震えていた、肩も微かに震えている。

「……」

感触を反芻するようにすりすり手首をさすりつづける。

美香はきゅつと指の第二関節を噛んだ。

歯の根まで震えてカチカチと音を立てそうだったからだ。

「……また来てんのか」

買い物から帰った義朗は玄関に学生靴があるのを見て美香が部屋にいることを悟った。

出かけている時に入れ違いで訪れたのだろう。美香には合鍵を渡しているのでそういう場合は先に部屋に入っている事も珍しくない。

(大丈夫なのかあいつ……)

人の心配ができるような身分ではないのだが思わずそう考える。近頃美香が義朗の元を訪れる頻度が明らかに増えてきている。

そうして掃除やら炊事やら義朗の世話を焼いていく、以前からたまに顔を出す事はあったがこの所は通い詰めていると言って過言でない。

「暇だから」と美香はいつも言う、しかしそんなにいつも暇なはずはない。

成績がいい美香は勉強も真面目にしているし人付き合いも多い、仕事の方もますます人気が出てきて忙しくないはずはないのだ。

「……」

「すう……すう……」

部屋に上がると美香が布団の上で身体を丸めて寝息を立てていた。

テレビがついている所を見ると部屋を片付けた後も義朗が帰ってこないでテレビでも見て待ってようと考えたのだろう。

「ほら見ろやつぱ疲れてるんじゃないか……」

ひとりごちながら毛布をかけてやる。

(ありがたいけど……コイツのためにならないよな……)

正直助かっている、だが疲れている美香の負担になっているのだとしたらそれに甘えるのは戸惑われる、いや、すぐに遠慮するべきなのだろう。

(でも……なあ……)

助かっているのは食事や身の回りの世話ばかりではない。精神的な面でも美香には大きく救われているのだ。受験は一人の戦いだ、どうしても孤独になりがちで精神的なストレスが大きい。

誰か腹を割って話せる友人か受験仲間でもいればいいのだろうが生憎義朗に親しい友人はいない。

最大の助けになってくれるはずの両親はもはや自分の事を諦め気味で顔を合わせるのも辛い。

実質美香の訪問が唯一の心の支えと言って差し支えない。

その美香に「もう来なくていい」と言うのは辛い、何より自分が苦しい。

ワハハハハ

考え込む義朗の思考を現実に戻したのはテレビから聞こえる芸人の笑い声だった。

気付けば寝ている美香のそばに立ち尽くしてぼんやりと  
していた、これでは美香の言う通り怪しい兄だ。

「んん……んん……」

寝返りをうつ美香を見てどきつとする、みじろぎした拍  
子に胸元がはだけてブラが見えている。

咳払いをしてそっと胸元を直してやる。

「……」

眩しい、眩しいくらいに白い肌だ、ミルクを練り上げて  
出来ているんじゃないだろうか。

(……エステ、続けてるんだっけか)

確かにその話を聞いた時から美香は更に綺麗さに磨きを  
かけている、そりゃあ人気も出るだろう。

それは肌の色艶や髪質だけの問題ではない、何か、全身  
に纏う雰囲気が少しづつ変化している気さえする、妖  
艶、というか……。

気付けば胸元を直してやった義朗の指は美香の髪を払い  
のけてその頬に触れていた。

吸い付く感触が指に伝わる。

その心地いい感触をもっと楽しもうと指が徐々に頬を滑  
り降り、首筋に届く、なんて滑らかな感触だろう。

「んん……んん……」

と、美香がくすぐったそうにみじろぎした、我に返って  
慌てて指を引っ込める。

「んんん……んんん……」

何の夢を見ているのか口元に微笑が浮かぶ。

義朗は呆然として立っていた、呆然として美香のその笑  
顔を見た後に視線を下に向けた。

はち切ればかりになってズボンを押し上げる自分のモ  
ノが見えた。

(……嘘だろ)

もう一度美香の方を見る、起きている時には見せないあ  
どけない表情。

「……」

記憶が遡る。

自分が何歳の時か覚えていない、でもベッドの中で眠る  
赤ん坊の美香を覗き込んだ時の事をよく覚えている。

こんなに人形みたいに小さな生き物がやがてはお父さん  
やお母さんみたいに大きくなるというのがすごく不思議  
だと思った。

子供ながらに頑張ろう、と思った事も覚えている。  
自分はお兄ちゃんになるんだ、妹を守ってやるんだ、  
と。

もう一度見下ろしてみる。

下半身に蠢いているのはむき出しの獣欲。

あどけない美香の、妹の顔を見て、性欲を覚えている。性欲を。

義朗の全身からどつと冷たい汗が吹き出た。

(……寝ちゃってたや)

美香は布団から身体を起こして目をごしごしと擦った。

「んー……」

何かとてもいい夢を見ていた気がする。内容は思い出せないが……。

部屋を見回してみると机に向かう義朗の背中があつた。ちやぶ台の上には空になったカップ麺が置かれている。

「もう夕飯食べたの？」

「ああ」

振り返らずに義朗は答える。

「起こしたら作ってあげたのに」

「ああ」

「……？」

美香は違和感を覚える。

「兄さんどうかした？」

「なあ、美香」

「うん？」

「もうここには来るな」

ずつと振り返らないまま義朗は言った。

「何で？」

「お前も忙しいだろ」

「そうでもないよ」

「疲れて寝てただろ」

「ちよつと昨日寝るの遅かっただけ、それに私兄さんと

違って要領いいし？」

「ぱりぱりと義朗は頭を掻いた。

「父さんや母さんも怒るだろ」

「あの人が怒ろうがどうしようが私に関係ないよ」

義朗はまた頭をぱりぱり掻いた。

「お前がいると俺の勉強だって進まないんだよ……」

おかしい、美香は義朗の後ろ姿をじつと見た。

「変だよ兄さん」

「変じゃっ……あの、なあ……」

義朗の手はばりばりと止まらない、悩んでいる時の癖、それも深刻に。

義朗は机から振り返った。

ひどく辛そうな顔をしていた、無理に何かを押し込めているような表情だ。

「とにかく……ここにはもう来るな、俺は大丈夫だから

……」

「全然大丈夫そうに見えない」

「あんなあつ!!」

義朗は突然大声を出す、美香は動じない。

「俺はっ……俺はなあ！人の役に立てるような人間にはなれないかもしれないけど……!!」

頭を抱えながら言う。

「せめてっ……せめて人さまに迷惑をかけないように……

……！迷惑をかけない人間にっ……!!」

その後何かが続けようとしていたが、結局言葉が見つからない様子で義朗はくしゃくしゃの頭をもっとくしゃくしゃにする。

「……なにそれ」

義朗が顔を上げると美香はじつと義朗を見ていた。

「その「人さま」って、私のこと？」

「そう、だ」

「家族じゃん」

「いいから!!出て行けよ!!」

「……」

義朗は顔を隠すように覆った。

「すまん……大声出して……でもな、とにかくもう来ないでいい、大丈夫だから……俺は本当に大丈夫だから……

……」

「……」

「……」

「……わかった」

美香はそう言うところこそと身支度を始める、義朗は項垂れたまま美香の方を見ることができない。

足音が玄関の方へ移動し、靴を履く音がする。

「……」

「兄さん」

声をかけられてやっと顔を上げる。

「無理しないでね、いつでも電話して」

美香はいつもと変わらない表情で手を振った、義朗は力なく手を振り返す。

ボタン

ドアの締まる音と共にいつもの静寂が帰ってくる、しかし義朗にはいつもよりもずっと重い静寂に感じられた。

どうして自分はこうなのだろう、もっとうまい言い方はなかったのか。声を荒げる必要があっただろうか。

美香は大人だ、親切心でやっている事を怒鳴られるという理不尽な対応をされたというのに怒りもせずはこちらを気遣ってさえくれた。

比べて自分は嫌になるくらい子供だ。

だけど。

子供だろうと何だろうと今の自分は美香に世話を焼いてもらう資格はない。

自分の意志の弱さは嫌になるくらい知っている。これから先まずまず綺麗になっていく妹に対して「間違い」を犯さない自信はない。

自分が「そういう人間」だとわかってしまった。

もし「間違い」が起こってしまったなら、それは美香の心にどれほど大きな影を落す事になるだろう。

「……ミカ……」

義朗は机に向かう、手は動かない、目には参考書の内容はおろか白紙のノートすら映っていない。

ミカ

ミカ……お前にはきつと素敵な人生が待っている、きつと皆に愛される、素敵な人と出会って幸せな結婚が出来る。

俺とは違う。

俺なんかには気を取られないで欲しい、躓かないで欲しい、真つ直ぐに歩いて欲しい、俺はお前の幸せを手伝う事はできない。

だからせめて邪魔をしないようにするしか出来ない。

俺は、

俺はもう駄目みたいだ。

すまない、ミカ、こんな兄ですまない。

ごめん、ごめんよ。

・

・

・

「んんんんん今日もよく頑張りましたあんんんんん」

「サロン・アラウネ」のマッサージ師、森千佳子（もりちかこ）はぐいぐいと伸びをすると閉店準備を始めた。

窓の外を見ているとばたばたと雨の粒がぶつかって音を立てている。天気予報は外れのようだ。

「みんなにはちようどいいですねー」

つんつんと店内を飾る花を指でつつくとその花は頷くように揺れて……。

ゾロゾロゾロ……。

いや、揺れているのではなく実際に頷いている、店内を覆うように生い茂っている草木がその胴体をゆっくりと動かしているのだ。

実は部屋に色とりどりに配置されている花達は沢山の種類がある訳ではなく、全てが一つの樹木から生えているものだ。

壁や地面に埋め込まれていて外見にはわからないが、この部屋は一つの大きな魔界植物にすっぽりと包まれた形になっている。

店で使われている香油やローション、薬品の類はほとんどこの魔界植物から採れたものを使っているのだ。

ついでにこの植物が留守の間の看守の役割も担っているのでセ〇ムにお世話にならなくても安心である。

「それではー、お疲れさまー、明日もよろしくですー」  
わさわさと揺れる花達に手を振ると森はサロンのドアに鍵をかけ、閉店のカードを下げた。

ポーン

と、フロアのエレベーターから到着音が鳴った。

「あらー？」

こんな遅くにこの階層に止まるのは珍しい。

がこん、と扉が開くと中に制服姿の少女が立っていた。

「あらあらー……モナカちゃん？」

「……」

「……モナカちゃんん？」

近頃常連になった少女の思わぬ訪問に驚きつつ声をかけてみるが、美香は何も答えない。

「……」

ただ、無表情でじつと俯いて立っている。

ピチャン……ピチャン……

水音で気付いた、よく見ると全身がずぶ濡れで前髪やスカートから水滴が滴っている。

どうやら雨の中を傘もささずに歩いて来たらしい。

「もしもくし？」

「……あつ……」

千佳子が目の前で手をばたばたと振って見せるとようやく目を瞬かせて千佳子の事を見た。

「……あれ……あつ……お店、あの……もう閉店ですよね？すいません」

濡れた髪を撫でつけながら美香は我に帰った様子で森に謝り始める。

そんな美香の髪に森はそっと触れる、芯まで冷えきっている。

「風邪をー、引いてしまえますよー？」

「ごめんなさい、すぐに帰って……」

「閉店はー、もう少し先にしますねー」

「え？」

そう言うと森は店のドアにかかっていた閉店のカードを取り外す。

「どうぞー」

「いえいえいえ、悪いですそんな……」

「お客さんそのまま帰らせてー、風邪引かせちゃったらー、マッサージ屋さん失格ですからー」

「で、でも」

「いいですからー、はいはいー」

遠慮しようとする美香を森はにこにこしながらドアの中に押し込んでしまう。

美香はバスローブ姿でほう、と息をついた。手には温かいハーブティーの入ったカップを持っていく。

「落ち着きましたかー？」

「ありがとうございます、本当に……」

その後、森は恐縮する美香を半ば強引にシャワールームに押し込んでとりあえず温まるように言いつけた。

いつものように間延びした優しい口調だったが何やら有無を言わさぬ迫力が感じられて美香は言われるままにシャワーを浴び、こうしてお茶までご馳走になってしまった。

「あの……お代は……」

「いいんですよー、これはサービスということー」

「……すいません」

美香は俯く。

しばしの沈黙が続いた。

しゅんしゅんとストープにかかったポットから蒸気の上がる音がし、窓からは変わらなはずはたと雨音がする。

それらの音と店に漂ういつもの森の香りで美香の心も少しずつ落ち着いていった。

「何かー、あったんですかー？」



さりげなく森は聞く。

「はい……………」

美香はカップをさすりながら小さな声で言う。

「私……………このお仕事……………モデル……………やめたいって思ってます……………」

「あら……………そうなんですかー」

「たくさん良くしてもらって……………お給料も不相应なくらいに貰って……………ちよっと人気なんかも出ちゃって……………それは、嬉しいんですけど……………」

森はにこにこしながら美香の話に耳を傾ける。

「やっぱり進路の事とか……………真面目に考える時期になってきて……………そうになると、勉強とか……………忙しくなってきたやいますし……………」

「うんうん」

「モデルも本業でやって行きたいという程には……………情熱が持っているかという……………そうとは言えなくて……………」

森はそっと空になったカップを美香から受け取った。

「あ、すいませ……………」

カップを洗い場を持って行きながら森はちよっとため息をついてみせる。

「うくん、やっぱり私じゃダメかしらー」

「……………はい？」

「本当の悩みはー、あまり人には言えないかもですけどー」

「……………」

「親しい人よりもー、あまり付き合いの深くない人とかの方がー……………例えば私とかー？」

「いえ、そんな……………」

「ぼろぼろーつと言っちゃおうってならないかなー？」

「……………」

「モナカちゃんは、好きな人はいない？」

この質問はマッサージュを受けながらの雑談の中で何度か聞かれた事だ。

「まだいないですね……………今はそれよりも色々……………する事が多くてあまりそういう事考えられなくて……………」

美香も何度か同じ返答を返した。今回も同じ答えを返す。

「むむ……………」

森は何故か首を傾げて困った顔になる。

椅子から立ち上がるとそっと美香の手を取って立ち上がらせる。

「あ……………？」

「ちよっとー、予定を早めてー、スペシャルコースしちゃうましようかー」

「スベシャルコース？」

森はにこつと笑ってみせる。

「モナカちゃんはー、色々溜め込んでやってますから

ー、スベシャルマツサージでー、老廃物と一緒に流しちゃいましょー」

「え、あ、あの、お代……」

「さーびすさーびす〜」

「いえあの、そこまでは、ちよつ」

森はシャワー室に押し込んだ時と同様に強引にマッサージュールムに美香を引つ張り込んでしまった。

（……ちよつと、いつもと違う香り……）

部屋に通された美香は台に上半身裸でうつ伏せの状態になつていた。

相変わらず周囲はジャングルのように緑に囲まれ、アロマの香りがする。

その香りがいつもと少し違うように感じた、いつもは爽やかな森の香りだが、今回はもう少し果実に近いような甘い匂いがする。

「落ちていてーくださいねえー」

美香の真つ白な背中に軽いマツサージを施すいつもの森の声もちよつと違う気がする、何となく、だが。

「つらいことー、たくさんありますよねー」

「そうですね……」

いつもの心地よさにうつつりとなりながら美香は答える。

「とくにー、モナカちゃんくらいの年頃だとー、色々ありますからね〜」

「ええ……」

「わたしもー若い頃はいっぱい悩んだんですよー、悩み事なさそうってー、言われますけどねー」

「なさそうに見えますね……」

「あー、それはひどいですー」

「んふふ……森さん、若い頃って言うほどお年じゃないじゃないですか……」

「いえいえ〜、こう見えてーなかなか……具体的な数字はー企業秘密ですけどねー」

「ふふ……」

森はこう見えてさりげない会話が巧みだ、合わせてついリラックスしてしまう。

「……森さんは、結婚してるんですか？」

「探してはいるんですけどねー」

「へえ……森さんくらい美人だったらいくらでも捕まりそうなのに……」

「モナカちゃんこそー、作らないんですかー？こいびと

ー」

「……」

これ関係の話はいつも適当に誤魔化している。

美香は何とも答えずに黙り込んだ。森もそれ以上は聞かずに黙って美香の身体を解していく。

「……」

「……」

「……森さん……」

「はいー？」

「人を好きになるって……どういう事なんでしょうか」

「うーん、大きな質問ですねー……人によって色々ですねー」

「……正しい人の愛し方って……あるんでしょうか……」

「……」

森は美香の顔を見る、美香は薄目を開けて虚空を見つめている。

「その人の幸せを願うのが、正しい愛し方なんじゃないか……」

「うーん……そればかりじゃないと思いますけどねー」

「例えば」

美香は感情のない声で言う。

「その人を傷付けてでも手に入れたっていう思いは、その人の事を好きって言えるんでしょうか」

「むしろ、兄のことが好きなんです」

「私、兄のことが好きなんです」

さらりと、何でもないことのように美香は言った。

「あらー、そうなんですかー」

「血の繋がった兄なんです、変ですよ」

「おかしいことじゃないですよー」

森は気付き、美香の背中がこわばって固くなっている。

「兄とセックスしたいって思ってもですか」

「ふふ……」

そのこわばりを解きほぐそうとしながら森は微笑む。

「おかしくないですよー」

「おかしい事です」

美香の声には相変わらず感情がこもらない。

「おかしい事だつて世間では定理されてます」

表情も虚ろで目に光がない。

「民法七百三十四条」

「はいー？」

「直系血族、又は三親等内の傍系血族の間での婚姻は認められていない」って、法律で決まつてる事なんです」

「物知りですねー」

「調べました」

法律とか、常識とか、知らなかった頃は本気で兄と結婚したいって思ってたんです。

だから親から改めて言われた時も信じられませんでした。

小学校六年生の時だったっけ。

親にリビングに呼び出されて真面目な顔で言われたんです。

「兄妹同士は結婚できないんだよ」って。

信じませんでした、からかつてるんだと思いました。

どうしてそんな事を禁じられないといけないのかわからなかったんです。

私が兄の事を好きだつていう感情にどうしてホウリツとか何とか関係のないものが介入してきて「それはダメ」なんて決めるんだらう、って。

納得のいく答えが聞きたくて何度も「どうして？」って聞いてたらとうとう怒られました。

「それは異常な事だ」って。

ショックでした、自分の兄が好きという気持ちは「異常」だつて言われたんです。

その場では納得した振りをしてましたけど心の中ではまだ希望を持ってました。

自分の両親がおかしいことを言ってるんだつて、そんな理不尽がまかり通るはずがないって。

今思うとそう思い込みたかつたんでしょね。

だからネットとかで調べて、学校で先生に聞いて、法律を知って……。

本当なんだって、兄と結婚する事はできないんだって  
段々わかってきて……。

そのあたりで私の思いに気付いた両親は一つだった部屋  
を二人に分けて。

兄と極力接触しないように、会話も交わさないように仕  
向けたんです。早く兄離れできるように。

辛かったけれどわたしも「普通」にならなきゃって我慢  
したんですけど……。

そうしたら不思議な事が起こったんです、ある日ビルが  
マツチ箱に見えたんです。

いや、おもちや箱かな？何にしろ大きなただの箱のよう  
に見えたんです。

親もクラスメイトも先生もはりぼての人形みたいに見え  
て、人間と喋ってる気がしない感じがして……。

離人症、とか、現実感喪失症候群とかそういう病気になる  
つたらしいです。うつ病の一種……みたいなの。

兄は多分知らないと思います、親に説明されてませんで  
したから。

中学二年くらいの頃だったかな、その年齢の子だと意外  
と珍しくないらしいです。

でも私の場合は症状が酷くて学校の後にカウンセリング  
とか受けて……それでも中々治らなくて……。

そこで先生が原因を探ったんです「何か長期に渡ってス  
トレスを受けるような事をしていませんか」って。  
分かりきった原因でした。

渋々両親が久しぶりに兄とちゃんと会わせてくれたんで  
す、説明されてない兄には何が何だかわからなかったで  
しょうけど……。

そこで、ああ、恥ずかしいな、兄さん忘れてくれてない  
かな。忘れてないだろうなあ……。

兄に会った瞬間、ばあ……って視界が晴れたみたいにな  
って……こんなに会いたかったんだって、会えなくて  
本当に辛かったんだって自分で初めてわかって。

わんわん泣き出しちゃって……人前で泣くの嫌いなのに  
……それだけじゃなくて。

その……お……お、おしっこまで……漏らしちゃって……  
……すごく、大変で、恥ずかしかった……。

森の手のひらに美香の体温が伝わってきた。覗いてい  
るうなじまでほんのりと色づいている。

羞恥と、その時の感情を思い起こしているのだろう。虚  
ろだった目にも恥じらいが浮かんだ。

しかしそれらもすぐ瞳の暗い闇の中に沈み込んでいっ  
た。

•

•

•

それ以降はちゃんと節度を持って兄に接するように努  
めました。

もう、思春期の麻疹みたいな想いは引きずっていない、  
両親にそうアピールするためです。また引き離されるの  
は嫌だったので……。

でも兄は一人暮らしを始めてしまっ……会える時間が  
ますます減って……。

辛い兄はだらしのない生活をしていたのでお世話をするっ  
て名目でたまたま通う事もできました。

勿論、両親はいい顔をしませんけど。

私の「病氣」が再発しやしないかって……あははっ、再  
発どころか一生治りようがないんですけどね。

それで私もずっと自分を騙し騙しやってきたんですけど  
……最近、ますます気持ち膨らんでくるのがわかるん  
です。

たまに胸を掻き毟りたくなるような思いに駆られたりす  
るようになってきて……つい、通う頻度が高くなってい  
って……。

まずいつて事は自覚してたんです。

両親の目もそうだけど、兄は大事な受験の最中なんだか  
らあくまで邪魔しない程度に抑えないといけないって……  
……わかってたんですけど……。

……会いたくて……。

それで……今日……とうとう兄に言われちゃいました……  
……もう来るなって……はつきりとは言いませんでしたけ  
ど……邪魔だったんだと……思います……。

•

•

森の触れている背中が波打った、大きなため息をついたらしい。

「あーあ……言っちゃった……」

「聞かせてもらえてー光栄ですー」

「森さんありがと……」

「はいー？」

「聞いてくれて……あと、肯定してくれて……」

「うふふ……本当にそう思っただけですよ、愛を妨

げる権利は誰にも何にもありませんからねー」

美香は首を捻って森の方を見た。

「驚きました、結構情熱的なんですわね」

「こう見えて私も魔物ですからねー」

「魔物？」

「あつ……えー、女の子はみんな魔物なんですよ〜」

「うふふつ……そう、ですわね……」

美香は首を戻してぐったりと力を抜いた。

「ああ……私の体のどこかに……末期の癌でも見つからないかなあ……」

「は、はいー？」

流石の森も唐突な言葉にびっくりする。

「もしも私が余命いくばくもないってわかったら……将来が無いってわかったら……兄にお願いできるかもしれないじゃないですか……「清い体のまま死にたくない」とか……」

美香はくすくす笑う。

「兄さん、優しくして優柔不断だから押し切れると思うんですよ……それに事の後に私は何も残さずに死ぬ訳です……から後腐れなくて兄さんの迷惑にもならないですし……」

陶酔した表情で美香は言う。

「それとか……隕石とかが降ってきて……あと数日で世界が終わっちゃうってなったら……世界はめちゃくちゃになりますよね……？そうなったら兄妹がどうか、どうでもいい事になりますよね」

くすくす

「実際そうなったら兄さん怖がって錯乱しちゃうかも……そこで私が優しくしたりしたら……ああ……して、もらえるかも……」

美香は唇を舐めた。

「兄さんに、レイプしてもらえるかも……」

森は感じる、自分が触れている少女の肉体の内面から溢れ出る強烈な欲望、普段知性と理性で覆って外に見せない美香の生の欲望。

それはまるで……。

「狂ってますよね」

美香はまた森の方を見ていた。

泣いていた。

暗い笑みを浮かべながらその目からは涙が溢れてこぼれていた。

「だって、私兄さんの幸せを全然考えてない、相手を思いやるのが愛情なのに、私は兄さんとセックスできるなら皆が不幸になってもいいって思ってる」

「……」

「これって愛情なんて呼べる感情じゃないですよね……」

「……」





「狂気なのかも……」

森は笑う、にっこり笑って答える。

「モナカちゃんはー、本当にお兄さんが好きなんですわねー……おかしくなつちやうくらいにー」

「はい……」

美香の目からははらはらと涙が落ちる。

「大好きです、好きすぎて、頭がおかしくなつちやつてるんです」

「もしー、世界が終わつたらつてー、言つてましたねー？」

「……？」

「うふふー……」

美香は違和感を覚えた。

最初に感じたのは匂い、部屋に満ちていた匂いが変わつていく。

いつもと違う微かに果物のような香りが混じる匂いがしていたが、今では濃密と言つていいほどの甘い香りが部屋に満ちている。

「もしー……世界が変わつちやつたらー……どうしますー……？」

そして植物達、確かに観葉植物が大量に設置されていたが、こんなに身体に触れそうなほどに生い茂っていただろうか。

「森……さん……？」

そして、森の変化。

いつもと変わらない微笑を浮かべる森のその柔らかな髪が徐々に徐々に色を変えていくのを美香は見た。

黒髪から緑……いや、鮮やかなエメラルドグリーンに。そしていつの間にかその身体に周囲の植物が絡みついている。

動いている、植物達が……。

美香は動けない。思考も停止してしまっている。

「もしもモナカちゃんが、人間で無くなつたら……」

「……？」

「…………？」

「人間でないものになれば……法律は、関係ないですよねー？」

美香の思考が弾けた。

森さんは今何と言ったか。

自分が人間でなくなれば？……自分を人間でないものに森さんはすることができると？

そうしたらどうなる？どうできる？

目の前で起こっている異常事態、常識を超えた事態。常識を壊す事態。

「壊してくれるんですか……？」

美香の一番欲しいものを禁じる「常識」

自分がずっと待ち続けていた事態、待ち続けていたチャンス。

決して来ないと思いつつ待ち焦がれていた光。今、自分はそれを目の前にしているのかもしれない。

美香の体が震え始める。

恐怖でも怯えでもない、高揚からだ。

そんな美香の思考を見透かしているように森は微笑んでそつと美香の頬を撫でる。

「お兄さんとー、愛し合える身体になりませんかー？」

「なりません」

一秒も迷わず答えた。

「もう、戻れませんかー？」

「構いません」

止まっていた涙がまた新しく溢れ出す。

「変えてお願い……何を引き換えにしてもいいから……」

「いないんです……兄さん以外は何も……」

森はよしよし、と美香の頭を撫でてやる。

「それではー「スーパー☆ラブボディコース」ですねー」

「……コースがあるんだ……」

・

・

・

ぞぞぞ……

しゅるるる……

部屋の中には異様な音が響いていた。

植物達が美香の目の前で蔦状になり、部屋の中央で何かを編み上げるように組み合わさっていく。

やがてそれは大木の幹のような柱状の形を作り、中に人が入れるくらいの洞を作った。

「さ、中にどうぞー」

森が美香を促す。

常人ならば足がすくむ状況だろう。

植物の作り上げた空洞は全体が生き物のようドクン、ドクンと鼓動を刻み、所々が緑色にチカチカと発光したりしている。

正直、かなり不気味だ。

「……」

美香は全く迷いのない足取りでそれに近付くと羽織っていたバスローブを解き、地面に落とした。

「モナカちゃんは……綺麗ですね……」

美香を後ろから見ていた森が言う。

仕事上世辞を言う事もあるが、これは森の本心からの言葉だった。

美香の体は美しい。マッサージで触れさせてもらっていた時からわかっていたがそうして一糸纏わぬ姿になるとより際立ってわかる。

雪のように白い肌に均整の採れた体つき、確かな女性を誇示する膨らみ、大人と子供の間にある少女の危うい魅力。

そしてその表情、全てを捨てる覚悟を固めた表情は伶俐ささえ感じさせる。

その少女が背景のグロテスクな緑の大樹とコントラストを成して奇妙に美しい絵画になる。

森はうずうずと腰を震えさせる。

この美しい少女を今からより美しく、そして淫らな存在へと生まれ変わらせてあげるのだ。

たった一人の愛する者を貪り、啜り、虜にして、愛し尽くす、そんな存在へと……。

「ここに、入ればいいんですね？」

空洞の淵に手をかけて美香が言う。

「そうです……いつもと同じようにリラックスして」

その中で横になって下さいねー」

美香はそっとその木の手触りを確かめる。

見た目から木の肌のように硬いのかと思いきや手触り自体は柔らかな……

(……ウオーターベッド?)

そんな感想を抱きながらぐっと体を薄暗い洞の中に押し込む。

(あ……すごい、宇宙みたい)

中で横になってみると暗闇の中で緑の光がちがちと瞬くのが見えてちよつとしたプラネタリウムのようなのだ。

そして濃密な蜜のような匂い。

「はい、リラックス」

「わっ」

突然頭上から森の声が聞こえてきて流石にびっくりする。

見上げてみると幹の内部から森の上半身がによつきりと生えて美香を見下ろしているのだ。改めて森が人間でない事がわかる。

しかしその浮かべる表情はいつもと変わらぬのんびりしたものであまり恐怖感湧いてこない。  
「……」

「やっぱりおつきいですね……」  
森の上半身は裸だ、服の上からでもわかつていたが非常に豊かな房の持ち主である。

「モナカちゃんも素敵ですよー？……きつとお兄さんもめろめろですわね」

「そう、ですか？」  
美香にとって一番重要なのは人と比べてどうかではなく、兄の目にいかに魅力的に映るかなのでそう言われると悪い気はしない。

「……体型とか体質とか、変わるんでしょうか……」  
「んふふー緊張するのは当然ですけれど、人間の頃よりも色々便利になりますよー、それに変わるのとはおつても気持ちがいいですからー安心して下さいねー」

「……ありがたいです」

どんな激痛にでも耐える覚悟だったが痛くないならそれに越したことはない、美香は胸を撫で下ろす。  
「……」

「あつ……」  
何か温かいものが身体に触れた。天井から流れ出て降ってきたのだ。

いつもの香油よりもっと粘度の高い感触。琥珀色のそれは……。

「……ローション……はちみつ？」

「うふふー、実はー普段使っているオイルもーそれが原料なんですすよー」

「そうなんですすか……」

言われてみれば濃密なその匂いはあの香油と似ている。  
ぬち……

「んっ……」

上から森が手を伸ばして美香の滑らかな肌にそれを塗り込んでいく、肌につける物の違いを除けばいつものエステと変わらない。  
ぬちやつ

「きゃつ」

予想外の部分に手の感触を感じて思わず声が出る。

見てみると地面から触手のような蔦が伸びて足に蜜が塗りこみ始めている。

一組だけではない、ぞろぞろと体の周囲から蔦が生えて全身に伸び、天井から垂れてくる蜜を体の隅々に丹念に塗り込みはじめる。

見る間に少女の体は淫猥なぬめりに覆われ、てらてらと光沢を放ち始める。

「あう……………んっ……………あくっ……………」

思わず声が漏れそうになって口元を抑えようとしたが、既に両手も蔦に捉えられて指の間にまで蜜を塗られていつている。

「我慢しないでー、声を出していいんですよー」

羞恥で真っ赤になる美香の顔を覗き込みながら森が言う。

そう言われても恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

「あっ……………やっ……………」

更に両足に蔦が絡むとぐい、と両足を開かせようとする。

思わず抵抗しようとするが変わるためならばと羞恥に耐えて力を抜き、蔦の動きに任せる。

ぬちゃ……………ねち……………にちゅ……………ぬる……………ぬち……………

「……………んうっ……………んくっ……………んん……………」

部屋には美香の肌に蜜が塗り込まれる音と、美香の押し殺した声だけが響く。

(……………気持ち、いい……………)

美香は快楽と必死に戦っていた、マッサージの気持ちよさとは違う、明らかに性的な快楽だ。

体中性感帯になったかのようにどこを触られても跳ね上がるほど気持ちがいい。

「くふう……………くういい……………」

全身がどろどろにとかされていく中、乳首と陰核だけが小石のように固く尖ってしまっている。

何より下腹部の奥はその中で火が燃えているんじゃないかという熱を持っている。

蜜に紛れてわからないが股の間はすでに洪水のような状態になっている。

「ふう……………ふう……………ふううん……………」

それでも美香は耐えた、声を出さないように耐えた。

「んふふ……………わかりますよ……………お兄さんから以外の刺激で……………気持ちよくなるのは嫌なんですわ……………」

……………?

美香の考えを読んだかのようなセリフが耳元で囁かれる。

「でも……これは愛されるための前準備ですからねー……お兄さんのために気持ちよく変わっちゃいませうね……」

ぐちゃにちゅぐちゅぐちゅぐちゅ

「んんんううあうつ」

その言葉と共に蕨の愛撫がより一層激しさを増した、もはやどこがどうされているかわからない。

「でもここは……とっておきましようね……」

どろどろになった膣口周辺をなぞりながら森が言う。

そうだ、これに耐えれば兄と愛し合えるのだ、兄さんと……兄さんに私の始めてを……。

そう考えたのがよくなかった、兄との交わりを想像した体がますます敏感になり始める。

まずい、これはまずい。

「あ……わかりますよ……お兄さんの事、考えたんですねー」

どうしてわかってしまうのだ。

「腰く動いちゃってますからね……」

「えあつ……？はつ……はつ……あつ……やあつ……」  
言われて始めて気付いた。

自分で知らないうちに腰がゆるゆると前後に揺れているのだ、見えない何かを迎え入れようとするように。

「やあつ違う、だめ、やあつ」

「体が……お兄さんのおちんちん欲しいよう、欲しいよう、つて……泣いちゃってますね……とつてもえつちですなね」

恥ずかしい、恥ずかしくて仕方ないのに腰の勝手な動きは止まってくれない。

「もつと……想像してみましようね……？お兄さん……モナカちゃんの大事に大事にとつてきた初めてを……捧げちやうところを」

「はつ……」

兄の顔が臉の裏にフラッシュバックした。次の瞬間、脳内が真っ白に塗りつぶされた。

美香の全身が蕨に絡みつかれながらもぐんつと反り返り、手と足の指がぎゅんつと握り締められる。

突き上げられた腰がぐんつくんつと今までにない動きで空腰を振った。

「……つ……つ……つ……」

何も写っていない目を見開き、口をばくばくさせる、多分、生涯で一番深い絶頂。

「あうつあ、あくつ……！はくうつ……！」

降りてきても全身のわななきが止まらない、腰も止まらない。

「気持ちいいですか？……？ふふ……お兄さんとの……好きな人とのセックスはこんなものじゃないんですよ……？」

言わないで欲しい、兄の事を言わないで欲しい、またいつてしまおう。

「ひ、ひ、ひいん……？」

と、美香は困惑した声を上げる。

腰の後ろ側、今までと違う部分に疼きを感じた。

むずむずする、何かが出てきてしまいそう……。

「あ………始まりましたね………」

「な………に………何………？ふあっ！？」

寝転んでいた地面が隆起し、ごろんと美香の体制をうつ伏せにひっくり返す。

「ここですわね？」

「やああつ………やあつ………そこ………何か………やああつ………？」

森はちようどその疼きのある部分を手ですりすりとして撫でる。撫でられる度に背筋に鳥肌が立つような快感を感じる。

「い、い、い、いいい………っ！？」

みし、みし、みし

脊髄が、背骨が音を立てる。体の内部から内蔵に響き渡るような音がする。

「あーっ！ああああつ！何か！にいつ………兄さつ………やああああ！」

猫の背伸びのような体勢で尻を持ち上げ、美香は地面に顔を擦り付けて思わず兄を呼ぶ。

未知の快楽で脳髄が焼かれる、焼き切れてしまう。

「出ておいで！出ておいで！」

持ち上がって撫でやすくなったそこを森が丹念に撫で回す、一撫でされるたびに腰がぶるり、ぶるりと震える。

「にいさああん」

ずりゅんっ

出てきた、何かが。

何かの器官が出てきた。

異物ではなく自分の体の一部なのだということが触覚でわかった。

手とも足とも違う、四肢に一つが加わったような……。

「はああつはああつ！？」

掲げられた自分の尻を見上げて美香は目を見開く。腰から何かが生えている、黒い……尻尾……？

粘液濡れのそれは誕生を喜ぶように……いや、困惑するようにしゅるしゅると身をのたくらせている。

「はいは〜い……落ち着いて下さいね〜」

なだめるように森がそれを撫でる、感触が伝わる。

「ひいいいんっ、し、尻尾……尻尾お……!!？」

「そうですよ〜尻尾ですよ〜」

生まれたてのその器官を撫でながら森が言う。

（ほ……本当だ……私、本当に人間じゃなくなってる……

……!）

許される。

（人間じゃないんだ……!!）

許される。

（わたし、にいさん……）

人間じゃないんだから。

「かえ……て……!!」

もう我慢しなくていい。

「はいー？」

もう耐えなくていい。

「変えてえ……!!私を、もつと……!!人じゃなくして

え!」

もう、人間に縛られなくていい。

「素敵、です……モナカちゃん……そーれいーこいー

こ〜」

人を捨てる事を厭わない、むしろ、愛がために捨てる。

そんな狂気。

最高の資質といえる、森は興奮を抑えきれない様子で泣いて懇願する美香の頭を撫でてやる。

「ひ、ひいっ……ぎっ……」

変化の兆しがまたも現れる。

めりめりと脳に響くような軋みが聞こえる、こめかみから（こうこうと血の巡る音がする。

「いいいいっ……あっ……!!」

ぎしぎしぎしぎし。

頭、頭から、何かが。

違う、背骨、背中から？

違う、両方から。

めちめちめちめち

部屋に肉が裂けるような生々しい音が響く。

「……ああああ……」

音とは対照的に美香は苦痛ではなく快楽を感じているらしい。

恍惚とした美香の頭部から髪をかき分けて角が現れ始める。

「くあっ」

がくん、と首が下がる。



むき出しになった背中にふた筋の傷跡のような筋が入り、それがみるみる広がる。

「うううう……」

濡れて折りたたまれた雛鳥の羽のようなものがその筋からずると現れる。

同時に頭部の角もみるみる形を成していく。

「ふうう……う……」

コウモリのそれに似たその翼が震えながら徐々に広がっていく。

「……く……」

美香がきつく閉じていた目を見開くと同時に翼が完全に広げられる。

「ああ……モナカちゃん、やつぱり綺麗です……」

翼の大きさには個人差がある、美香の翼は大きかった。

自身がその翼の影に覆われ、白い肌と不思議な光彩の瞳が暗闇に浮かび上がる。

「はあ……あ……あ……」

「ああ……とつても……」

森は感動に身を震わせながら美香の変容を見守る。

驚いた事に成熟したサキュバスに近い魔力を感じる。

ふわり、と翼が広がる。

森はうっとりとその姿に見とれた。

「……」

「も……もしも……」

「……」

美香は再びバスローブ姿になっていた。

「変化」の後にもう一度シャワーを浴びさせてもらって

蜜まみれの体を清めた後だ。

その美香は今マツサージ台の上で体育座りをして裸足のつま先をうねうね動かしている。合わせて新たに生えた尻尾もうねうね動いている。

「……」

お世辞にも機嫌が良さそうには見えない。というか明らかに拗ねている。

「聞いてなかった」

「え、え、それはですねー」

「あんなにヤらしい方法だなんて聞いてなかった」

「あはは〜」

「もお……サイテー……兄さん以外にあんな……あつ！」

と、急に何かを思い出したように周囲をきよろきよろと見回すと自分の鞆を見付け、携帯を取り出す。

「やば……着信だらけ……あちゃあ……何も考えずに遅くまで出ちゃったしなあ……」

「あ、ご両親には〜私から連絡しておきました〜……ちよつとお仕事中に気分が悪くなつて〜……お休みしてますつて〜」

「森さんナイス、これでこの件は許します」

「許されました〜♪」

「私の服、どこでしたっけ」

「どうぞ〜」

美香はバスローブを手早く脱ぐと制服に着替え始めると、少し困った顔になる。

「ちよつとこれ……邪魔……」

「それは〜しまおうとすればしまえるんですよ〜」

「どうやって……あ、しまえた」

するする、と背中に羽が収まり、尻尾も縮んで目立たなくなる。

美香がその上に制服を着なおすとそこにはいつも通りの美香の制服姿があった。

鏡を見てさつと髪を整えると美香は森に頭を下げた。

「……本当に、ありがとうございます……これで私は……やつと……」

最後まで言わずに顔を上げ、美香は森に微笑みかける。

「帰るんですか〜？」

「はい、遅くなつちやつたし……お父さんお母さんも心配してますし……」

「珍しいですね〜」

「はい？」

森は頬に手を当てて首を傾げながら言う。

「魔物になった子は〜大抵すぐに想い人の元に行きたがるものなんですけどね〜」

美香はくすりと笑う。

「もちろん本当はそうしたいですよ、この羽で今すぐ兄さんの所に飛んで……文字通り飛んでいきたい気分ですけど〜」

でも、とマフラーを首に巻きながら美香は続ける。

「急いで仕事を仕損じる」ですよ、まずはちゃんと家に帰って……いつも通り寝て、いつも通りゴハン食べて、いつも通りガッコ行つて……あ〜」

美香はまた携帯を開くとスケジュール表を開く。

「お仕事の予約も入ってるし……ちゃんと出るから心配しないで下さい」

「律儀ですね」

「それが取り柄ですから……それじゃ、お世話になりました」

いつものヘッドホンを被ると美香は出口に向かった。

「お疲れさまでした」

と、ドアを開ける直前に美香は振り返って言う。

「もう、確実なんです」

「はい？」

これまでのどの笑みとも違う笑みを浮かべて美香は言った。

「確実に、私は兄さんと結ばれるんです」

笑って美香は出て行った。

その姿を見届けて森はほう、とため息をついた。

凄い笑顔だった、どんな聖人でも墮落させる魔物の笑みだった。

「適性つってあるんですね……ふふう……お兄さんはあ……凄いことになっちゃいますね」

美香の兄の行く末を思い、森もまた淫らな笑みを浮かべた。

「妙子さん、美香ちゃんは……」

「ええ、森さんから連絡があつたわ、彼女はもう「こちら側」よ」

「昨日、ですか」

「みたいね」

「どうりで……」

いつもの喫茶店で吉田と妙子は先日と同じようにテーブルの上に広げた写真に見入っていた。

「見違えたでしょ」

「……「変化」した後のモデルが魅力的になるのは当然ですが……それにしてもすごい、これは」

並べられた写真は以前と同様美香のものだが以前とは美香の表情が違う。モデルらしい満面の笑顔よりもあるなしかの微笑を浮かべた表情だ。

そうした方が美香の魅力を引き出せると吉田が考えての事だったがそれが当たりだったらしい。

いや、それだけではない。

写真を通してすら伝わってくる凄絶な艶、色香。

「撮ってる手に鳥肌がずっと止まらなかったですよ……」

……

「撮った時期がね」

「はい？」

「変化した昨日から今日の今まで普通のサイクルの生活送ったそうよ、彼女」

「へえ……？それはまた珍しい、よくその……正常でいられましたね」

妙子は写真の一枚を拾い上げて見る。

写真に映っている美香は木漏れ日の中で微かな笑みを浮かべてカメラを見ている。

写真を持つ妙子の手が一瞬震えた。

「キレイる娘ねえ……」

「キレイる？」

「知ってると思うけど「変化」の直後っていうのは精が不足した……いわば飢餓状態なのよ、だから想い人がいるならすぐに会いたがるものなんだけど……彼女は飢えを抑えて冷静に困りに行っちゃって事ね」

「……この写真の彼女は……」

「飢餓状態で仕事をこなしてるって訳ね……信じられない精神力」

「ばさ、と写真をテーブルに落として妙子はコーヒーを啜った。」

「売れるでしょうね」

「間違いないですよ、魔物の魅力がこんなにはつきりと撮れた例はないんじゃないですか？」

吉田は興奮気味に言う、カメラマンとして今までにない手応えを感じているようだ。

「でも、彼女は当分駄目ね」

しかし妙子の表情には諦観が浮かんでいた。

「駄目、とは？」

「撮影の後、獲物を狩る目で帰っていったもの、当分は連絡つかないんじゃないかしら？」

「ああ……」

美香は降り注ぐ熱い水滴を目を閉じて受けていた。

滑らかな肌の上を水滴が滑り落ちていく。白い肌の上を、そして艶やかな黒の上を。

目を開けて視線を背後にやると自分に生えてきた新しい器官……羽と尻尾が揺れている。

「……ふふ」

微かに笑みを浮かべた美香は尻尾を自分の手にしゆるしゆると絡み付かせる。

逸脱した。

人を逸脱した。

開放された。

違う、大義名分を手に入れた。

人間じゃないんだから人間の法律に従わなくていい。

そうだ、欲しかったのはそういう「言い訳」だ、自分は

元々狂っている。実の兄妹に異性愛を感じる人間だ。

それが異常と言うなら生まれた時から自分は異常なのだ、その異常者が言い訳を手にしてタガを外したただけ

だ。

カリッ

無意識に尻尾に歯を立てた、確かな感覚が返ってくる。

そういえばこの尻尾はちよつと男性器に似てる、兄さんのもこのくらいだろうか？

ペロ……

ああ、早く欲しいな、この身体に変わってからもうずうつと我慢してる。

おなかすいた

おなかすいた

おなかすいた

おなかすいた

おなかすいた

おなかすいた

早く欲しい、はやく食べたい。食べたいよう。

指がなだらかな下腹部の上を這う。極限の空腹を訴えて

くる腹の上を。

飢えを訴えているのは胃袋ではない、もつと下にある臓器だ。

その雌の器官が早く欲しい早く早くときゅんきゅん訴えてくるのだ。

「ん、く、」

と、美香はシャワーの温度を変えて冷水を浴びた。

落ち着け、落ち着かないと。

急いで事は仕損じる。

じつくりいこう。

頭を冷やした美香は浴室を出て制服に着替え始める。

「……」

もう学校から帰って仕事も終えたので私服で構わないのだが兄の元を訪れるにはこの服装が学校帰りのついで、という言い訳が立つので都合がいいのだ。

鏡の前に立ってさつと軽く髪を整える。特に気合を入れない必要はない、いつも通りで行く。

多分それが一番だ。

「美香、どこに行くの」

玄関に行った所で母に呼び止められた、学校から帰ったのに制服でまた出かけようとするのだから当然怪しまれる。

「兄さんの所」

美香は偽りなく答える。見る見る母の表情が険しくなる。

「待ちなさい美香」

美香は立ち止まって母を振り返る。

「義朗の事は……」

言いかけた言葉を最後まで言えなかった。振り返った美香が微笑んでいたからだ。

今まで見たことのない娘の表情だった。胸に困惑が広がる。

（……本当に娘？……）

そんな疑問までもが浮かんでくる。

言葉に詰まった母の元に美香が歩み寄ってくる、思わずたじろいだ。

ぎゅっ

「えっ……あつ……み、美香？どうしたの？」

美香は母を抱き締めていた。昔、ずっと昔無邪気だった頃のように。

「大丈夫だよお母さん」

胸に顔を埋めたまま美香は言う。

「兄さんの事は私に任せて……全部、うまくいくから」

「……」

母はその言葉を諫めようとした、が、声が出なかった。

抱きついた娘の体から何かが流れ込んでくるような感覚がする、何か、何か異常な事態が進行している、この娘は、何か違う。

母は娘に違和感と同時に恐怖を感じた。いや、ただ怖いのは違う。それは「畏怖」と呼べる物だったのかもしれない。

「……」

美香が腕を解いて離れると母はべたん、と膝を着いてしまふ、腰から下が軟体動物になったように力が入らない。

一体どうしてしまったのか。

「美……香？……あなた、美香、なの……？」

「私は私だよお母さん」

美香はそう言つて笑うと玄関に下りてとんとん、と靴を履く。母は崩れ落ちたまま立ち上がる事ができない。

「ま……待……待……待ちなさい……美香……美香……」

……！

震えながら伸ばされた手に美香はばたばたと手を振り返してドアから出て行つた、いつも学校に行く時と同じように。

美香は傘をさしてその中を歩く。ヘッドホンから耳に流れ込むのはショパンの音色。

友人から勧められる流行歌も悪くないが美香はやはりクラシックが好みだ。

ゆつたりとした音調と歩調と雨音。

落ち着いている。体の中に高揚を抱えながらも今までにないくらいに精神が安定している。

きつと確信を持てたからだ。いや、覚悟が決まつたと言つた方がいいかもしれない。

もう、諦めなくてもいい。

美香の口元に自然に微笑が浮かぶ。

(それにしても……)

何か今日は視線を感じる。いや、普段から人目を引く容姿であるのは自覚しているが今日は一段と顕著だ。

ふいと目を上げると男子学生の集団と目があつた、違う学校の制服だ。

先ほどまでがやがやと騒がしかったのが何故か急に静まり返つてこつちを見ている。

皆一様にぼんやりと呆けた顔で赤面していたが、美香と目が合うと慌てて逸らす。

外は雨が降っていた。

そういえば今日は学校でもやけに男子からの視線を感じたし、友人からも「いつにも増して美人すぎ」とか言われた気もする。

気もする、というのは今日一日はひたすら飢えと疼きに耐えるのに手一杯で他は何も頭に入らなかったからなのだが。

正直誰にどう見られようと気にならないが、人から美人に見られるという事は兄から見てもそうなのだろう、だとすると嬉しい。

（待っててね兄さん、私の兄さん、今行くからね、すぐ行くからね）

雨の中、シヨパンの音色と共に美香は無自覚に周囲を魅了しながら兄の元へ急いだ。

「……はは……」

義朗は自嘲の笑みを浮かべた。昼寝してしまった、三時間も。

あの一件以来義朗はある種の自暴自棄に陥っていた。

元々自己否定気味な性格だったところに「妹に対して劣情を抱く」という経験は自らに失望するのに十分な衝撃だった。

机に向かう時間が減り、ひたすらに惰眠を貪るようになった。

時折思い出したように親に対する懺悔の念が沸き起こり、自分の不甲斐なさに泣き伏す時もある。

そしてそれよりも頻繁に引き起こされるのが妹に対する慕情だった。

思えば自分の冴えない灰色の人生の中で数少ない色を持った記憶には全て彼女が関わっている。

唯一自分を認めてくれて、対等に接してくれて、無条件に優しくしてくれる。

精神的な意味では親よりも彼女に支えられて生きてきたと言っても過言ではない。

義朗は携帯に登録されている美香の番号をじっと見つめる。

布団の暗闇の中で義朗は目を開いた。ごくごくそと携帯を取り出して画面を見てみると夕方の五時。



邪魔だ、なんて言ったが本当は来て欲しいのは言うまでもない。

「……」

義朗は目を閉じてばたん、と携帯を閉じた。それだけは駄目だ、自分がどんなにどうしようもない男であっても彼女に縋るのはもう許されない。ほかでもない彼女の為にも。

ピンポーン

「……」

義朗は布団から顔を出した。誰だろう、親だろうか。

美香？

違う、そんなはずはない。あんなにはつきりと拒絶したのだ。

「……」

誰にも会いたくない。

もう一度布団を頭から被る。

ピンポーン

「……」

ピンポーン

「……」

ピンポーン

義朗は荒んだ目でのそのそと立ち上がった。

ドアを開ける。

美香が傘をさして立っていた。

「……えっ……」

義朗は呆けた声を上げた。

美香は微笑んでいる。

(……天使……?)

馬鹿らしい事だが一瞬そんな単語が頭をよぎった。

地獄の底に沈んでいる自分に手を差し伸べる女神、そんな風に見えた。

同時に心臓が驚く程大きな音を立てた。

そんな経験をした事はないが一目惚れをしたならこんな感覚だろうか。

……見慣れた妹の顔に……?

見慣れた? 違う、いつもと違う、いつも綺麗だったけれど、今日の前にいる彼女はそれにも増して……。

瞬間、義朗は自分に恐怖を感じた。自分はまた妹に異性を感じている、欲望を感じている。

パン！

義朗はノブを一気に引いてドアを閉めようとする、美香は素早く足をドアの間に挟んだ。

「も、もう来るなって言っただろ!?」

「音沙汰無いから心配したんだって……!ちよ、痛いって!」

強引に閉めようとする美香が痛がるので仕方なく開ける。

「もう……邪魔になるなら来ないでおこうと思ってたけど、そう言うのはちゃんと自己管理できるようにしてから言つてよ、ひつどい顔してさあ……!」

「……!」

義朗は頭を搔く、確かに鏡で見ても明らかに自分の顔は以前よりやつれている。

「髭もこんなに生えて……!」

美香は手を伸ばして無精ひげの生えた義朗の顎に触れた。

「さ、触んなよ!」

何故か触れられた瞬間全身に電気が走るような感覚を覚えて義朗は妹の手を払いのける。

近づかれた拍子にふわ、といい香りが鼻をかすめる。

以前も使っていた香油だろうか。前と違ってもう少し甘い匂いがする、スモモに近いような匂い。

「ほら、ごはん作ってあげるから、兄さんが栄養失調で死んだら私の管理が悪かったみたいで夢見が悪いじゃない!」

「ペットか俺は……!」

軽口を叩きながら美香はドアの内側に入る。義朗も観念して美香を玄関に入れる。

ボタン カチャ

美香は後ろ手に鍵を掛けた。

部屋の方を向いていた義朗は気付かなかった。

鍵を掛けた瞬間、美香の口元が淫らな笑みの形に歪んだ事を。

はい

もう逃げられないよ兄さん

かわいいなあ兄さん

自分が何を部屋に入れたかわかってないんだよね。

「来る前に連絡くらい入れろよな!」

「連絡したって出ないでしょ兄さん!」

それも一瞬の事で、義朗が振り返った時既に美香はただの妹の顔に戻っていた。

「……あ」

と、玄関に上がったところで美香は手に持っていたトートバッグをごそごそと探り始める。

「あーあ……割れてる」

見てみると中にはスーパードで買ってきたらしき食材が入っていたがその中のパック入りの卵がいくつか割れてしまっていた。

どうやら玄関先でもみ合った結果らしい。

「もう……急に閉めるから……」

「す、すまん」

「卵、使い切らないとね」

言いつつ美香は狭い台所の冷蔵庫に向かう。

「オムレツかな……あ、冷ご飯あるじゃん、オムライスだね」

てきばきと料理の支度を始める美香の後ろ姿を義朗はぼんやりと眺め……。

（ダメだ、ダメだ……！いつまでもこんな事じゃ……！）

ぶんぶん頭を振ると義朗は美香に声をかける。

「な、なあ、ミカ、来てくれるのは本当ありがたいんだけどさ……いつまでもこんな事じゃ俺自身にも……」

「兄さん」

振り返らないまま美香は割り込むように言った。

「言いくい事言うけど、兄さんうつ病になりかけてると思うよ」

「えっ……？」

「最近眠れる？物事に集中できる？食欲ある？何か楽しみがある？」

美香はエプロンを付け、まな板を取り出す。

「消えちゃいたい、死んじやいたいって思ってる？」

「……」

「テレビの定番で見たんだけどね」

玉ねぎの皮を器用に包丁で剥き始める。

「受験生でそうやって悩んで病気になるっちゃった人の話を……」

トン トン トン トン

「結局、悩んだ末に誰にも相談しないまま自殺しちゃってさ……」

トン トン トン トン

「残された家族のインタビューとかやってて……皆すつごく後悔してんの、何で相談乗ってあげなかったんだらうって……」

トン トン トン トン

「……玉ねぎめっちゃ沁みる……ぐす」

トン トン トン トン

「家族なんだから、苦しかったら頼ればいいのにね……家族なんだからさあ……」

義朗は手を強く握り締めた。

結局自分は子供だ、心配をかけないようにと思つて余計にかけている。

妹を遠ざけたのも彼女を思つての事だったが……結局、今思い返してみると彼女に世話を焼かれる事による良心の呵責から逃れたかっただけなのかもしれない。

世話を焼いてももらったらその分頑張らないといけないのだ、頑張りたいくないから世話を焼かれなくなかったのだ。

「……ありがとうな、ミカ」

「何が？」

「いや、何でもない」

「変なの」

振り返らないまま料理を続ける美香の後ろ姿に義朗は感謝した。

・

・

・

じゅわわ

チキンライスを作りながら美香は後ろでリラックスした様子の兄を意識して微笑む。

単純な兄さん、かわいい兄さん。

兄さんは意識していないかもしれないけど、兄さんは私の事を盲信している節がある。

私の言う事は正しいことだつてすぐに信じ込んでやう。だから今度も信じてね。信じさせてあげるね。

そう、私たちは家族なんだから支え合うのは当然なんだよ。

心も体も支え合うのが普通なんだよ。

私は妹なんだから、家族なんだから。

その立場を最大限に利用して。